

# ゴトシといふ語の形態と位相

——今昔物語集の用例二三——

春 日 和 男

## 一

いはゆる比況の助動詞ゴトシの用法が、形態上複雑な分化を遂げてゐることは周知の通りである。例へば今昔物語集における用例等は有名であつて、既にその現象を委さに観察した研究もいくつか発表されてゐる。然も、そのやうなゴトシのヴァリエーションがいかなる経過で発達し、実用されてゐるものであるかといふ問題は、解決が容易でなく、未だ十分に説き明かされたとはいひ難い。そのやうな問題解決の為の手がかりとして、ゴトシの用法上にあはれた位相について少しく考察してみようと思ふ。

ゴトシは男性用語（男子語脈）に属し、漢文訓読調の語であるといふやうなことが一概に説かれてゐて、これを今昔物語集の場合、和文調の「様ナリ」と対照して考察する方法も、文体論的にしばしば用ゐられて来た所である。元来ゴトシは副詞形成の用法に立って発達したものであることは、体言コト（事）と同義である語幹ゴトが、上代以来副詞的に用ゐられ、中古以後も、地の文、歌詞、男女

いづれもの対話文等その用法が広汎であり、現代の九州方言等にもなほ生きてゐることによって肯ける。万葉集にはゴトク・ゴトシ・ゴトキの形容詞的活用語尾の三形が見られ、その中でもゴトク（連用・副詞形）が最も有力に用ゐられ、平安朝に入つてゴトクニの形をとることが行はれたことも、既に知られてゐることであつて一々の用例を挙げるまでもない。然しゴトクニの発生は、ゴトクの語尾を形容詞の連用語尾として認めない結果であるから、ゴトシの副詞的用法を更に強化したものとといふべく、いはばゴトシが形容詞的用法において発達するか、副詞的用法において発達するかの分岐点を示すものであると考へられる。

さて、ゴトシ（ゴト）については、その上位語との接続形態において、活用言連体形+ゴトシ（ゴト）・活用言連体形（または代名詞）+ガ+ゴトシ（ゴト）・体言+ノ+ゴトシ（ゴト）の三種があり、別にカクノゴトシ（カクノゴト）の如き特別に熟合した語があるわけであるが、今はしばらく、これ等を区別せずに取り扱つてみる。それはいづれの場合にせよ次の三つの性格が適合してゐるからである。

1、ゴトシにおける形容詞的活用語尾が十分に發達してをらず、特に已然形ゴトケレの形がないこと。

2、連用形ゴトクのウ音便を欠くこと。

3、補助動詞アリが連用形ゴトクに直結せず、ゴトクニに接続すること。つまり補助活用はカリ活用のゴトカリではなくて、ナリ活用のゴトクナリであること。

以上の三項はゴトシの特性として常識に属するものであるが、しばらくこの三つに若干の私見を加へて見ようと思ふ。

註 1) 堀田要治 「如シ」と「様ナリ」とから見た今昔物語集の文章(国語と国文学十八巻十号)

石垣謙治 語法より觀たる今昔物語——「が」「の」の用法二、三について(国語と国文学十八巻十号)

2) 前項 堀田氏論文。

## 二

### (1)

ゴトシに已然形ゴトケレのないことは、上代形容詞一般に通ずる特色であるが、ゴトシはその様な發生期における未完成な語尾形態をもつて後世に伝へられたことになる。この現象についてはコトといふ語幹に形容詞的語尾と動詞四段活用的語尾とが混交して付着したと見る仮説もあるが、たとひそれが容認されたとしても、それは独りゴトシについてのみいはれるものではなく、形容詞全般について適用されなければならないから、その原因は別途に考へられなければならない。ただ注意すべきはカクノゴトケム<sup>2</sup>といふ未然形の例が西大寺本金光明最勝王經古点と類聚名義抄の中に稀少ながら見ら

れることが指摘されてゐる事實である。一般のゴトシとカクノゴトシとはその性格がかなり異なるから一概にはいへないけれども、少くとも右の痕跡から上代におけるゴトシに未然形と已然形のゴトケ(申)を想像することも可能なわけである。然し實際の用例としては、已然形は

我カ智恵ハ小キ箱ノ水ノ如クナレトモ、汝千万里ノ智恵ノ景ヲ此ノ小キ箱ニ浮ヘヨ(今昔四ノ二五)  
の如きゴトクナレと、

諸仏の功德は亦是(の) 如クアレば一切の有情は知ルこと能(は)ズ(不) (西大寺本金光明最勝王經古点卷二ノ四)

の如きゴトクアレの二通りであつて、特に後者は漢文訓読用語として仮名点で付けられ、しかもゴトカレ(ゴトケレの代用)といふ実在しなかつたカリ活用の潜在形として注意される。だいたいゴトシ(カクノゴトシ)は大まかに男子語脈に属するといはれ、特にそれが漢文訓読用に使はれた場合、訓読文の自からなる性格として、語の古形がそのままに残存することが、しばしばであることから、ゴトケとゴトクアレとはゴトシの形容詞的性格の顕現と見なすことが可能であらう。それはゴトシにおける奈良朝以来の古形として、純漢文訓読調に残された活用語尾(補助活用)であると考へられてよいと思ふ。一方ゴトクナレは全く性格の異なつた已然形であつて、しかもこれが標準として考へられてゐることは、国文一般に通用する語であるからであるが、この形容動詞的なゴトクナレと形容詞的なゴトケ・ゴトクアレとは文の異なつた位相の上に成立してゐると見なければならぬ。

(2)

次には連用形ゴトクのウ音便化しない点についてであるが、これにはここにいふ位相の面からと、純形態的な面からの説明が可能の様である。例へば形容詞連用形のウ音便化は草仮名の物語、日記類には比較的早くから頻出するのであるが、訓点資料におけるそれは、用例が少く、一般に知られてゐる例では、石山寺本成唯識論寛仁四年点(一〇二〇)の「命短<sup>カウ</sup>」等であらう。もつとも宇多天皇宸翰周易抄には「深微<sup>久は之字須</sup>」があつて古例として引用されるが、資料の性格が少し違ふと思ふ。つまり訓読文にあつては形容詞連用形のウ音便は余り用ゐられなかつたと解しなければならぬやうである。これは一方ではゴトクのウ音便化もあらはれ難いといふ理由になると思ふ。「形容詞の音便現象はイ音便が既にさうであるやうに、多分に位相的であるからである。

更に形態的な説明を付加すれば、ゴトクは直接用言に接続するよりも、既述の如く、平安朝以後はゴトクニの形で連用接続する傾向が強くなつたことである。これは一般にゴトクの形容詞的語尾の機能が衰頽して、ゴトクを一個の準体言として見なす傾向と揆を一にするものであるが、これが為にウ音便の起る余地が与へられなかつたといふやうにも考へられる。但しこの際問題になるのはウ音便の発生とゴトクニの形成との時間的關係であらう。思ふにゴトシは一齊にゴトクニの形をとつたわけではなく、一方ではゴトクが依然有力に用ゐられてゐた事実からすれば、必ずしもこの考へはその現象に対して満足すべき説明ではないやうである。例を卑近な源氏物語

にとつて見ても、

女もいみじく靡<sup>(う)</sup>きて、さもありぬべう思ひたり(夕顔)

はるくばかりに聞えまほしう侍るを(桐壺)

かくてはえやむまじう御心にかかり人わろくおもほしわびて

の如きベシ・マホシ・マジ等の形容詞的形態の助動詞の連用形がウ

音便を起こしてゐる一方では、

此頃は猶もとの如くさぶらはるべきよしおとども勧め宜へば

またもとの如くに帰り給ふべきさまに(須磨)

(以上湖月抄本によるも、対校してなるべく無難な例のみを用ゐた。)

の如く、ゴトクとゴトクニが並用されてゐて、ゴトクの用例の方が遙かに多い。しかもそれは地の文とか対話文とかいふ文体上の相違ではないやうである。さすれば、ゴトクニの発生とゴトクにウ音便の起り得なかつた理由とを關係づけることも困難になるやうである。つまり、ゴトシの連用形にウ音便の起り得なかつた理由は、端的にいへば、ウ音便の背景となつてゐた国文調の範囲内では、ゴトクを形容詞の連用形とは見なさず、副詞または準体言として用ゐてゐたのであり、その為にゴトクニ(ゴトクナリ)に發展したわけであるが、一方漢文訓読の世界では、ゴトクを形容詞的活用の連用形と見なしてゐたから、そこにこそウ音便発生<sup>(3)</sup>の素地は十分あつたものの、訓読調の保守性はウ音便に対して一向熱がなかつたのであるといふことになる。この点にもゴトシの形態と位相との關係があるや

うである。

(3)

次にはどうしてゴトシには補助活用としてゴトカリが育たなかったかといふ問題である。これにも位相上の理由が主因となつて絡んでゐるやうである。一体ゴトクニといふ副詞的形態は漢文訓読上に発生したものではないこと、敘上のことにおいても想像がつくと思ふのであるが、試みに、中田祝夫博士著「古点本の国語学的研究——訳文篇」の索引を利用していただくと、ゴトクニの形が訓読上にあらはれてゐるのは次の六例であつてゴトクの多数なるに比すべくもない。

慧の日光<sup>ヒカリ</sup>を寝<sup>ヤス</sup>メシ（ときより）達<sup>トク</sup>—学雷<sup>ガク</sup>（訓）のゴトクに謝<sup>シヤ</sup>（言）して、（地藏十輪經元慶点序）東京を潰<sup>ミダ</sup>シ而<sup>デ</sup>、鼎<sup>カナヘ</sup>ノゴトクに峙<sup>ソバ</sup>タチ（大唐西域記長寛点序）

形—勝の故墟<sup>アハラ</sup>魚鱗（の）ゴトクニ間に峙<sup>テ</sup>（て）リ（同 第七）  
其の次第の如クに体遍ク用寛<sup>キ</sup>キ（を）モチ（法華玄賛古点 第三）  
繩に扇を繫<sup>ケ</sup>（け）たるが如クニナレリキ（法華義疏長保点 序品初）

仏身を供養するが如クニスルゾ「ぞ」（同 序品末）

大体において、古い資料ほど用例が少く、ゴトクとの差が、数量的に大であるやうである。右の六例中、前三例は補読されたものであるが、後三例は「如」字を訓じて、送り仮名を施したものであるが、その価値は自から異なると見てよい。補読された部分のゴトクニは、同じく補読された他のゴトクの用例に比して勢力が数量的にかな

り伯仲してゐるのであるが、送り仮名による「如クニ」と「如ク」との差は後者が数量的に遙かに優越してゐるからである。この事実には漢文訓読の際「如・若・等・猶」等の漢字を副詞的に用ゐる際にはゴトクと訓むのが原則的であり、ゴトクニはそのやうな字面を離れて補読する際、つまり国文の上に流用する際、たまたま漢文訓読調の中に出現した特殊な例となるのではなからうか。つまりゴトクナリはこの様な国文調のゴトクニの上に生長した形態であると思ふ。

一方、純粹の漢文訓読文においては、ゴトクがその基本形であることになるから、補助活用としてはゴトクナリの形をとることは自然である。例へば、金光明最勝王經古点ではゴトクニ・ゴトクナリの形はあらはれず、補助活用としては次の様なゴトクナリの形であらはれる。

時に釈梵等い仏に白<sup>シ</sup>（し）て言<sup>ハ</sup>（は）ク「是の如クアルベカリケリ、世尊」とまをす（三ノ五）

上下和穆にして、猶水と乳との如クアラむ（六ノ十二）

淨妙なること蓮華の若クアラシム応し（九ノ廿二）

猛キ火の周遍せるが如クあるラシ（十ノ廿六）

これは前掲の「如クアレバ」と共に未然・連体・已然の各形における補助活用としての形態であつて、しかも音約されて、ゴトカリに發展すべき萌芽である。このことをわたくしは、既に「ゴトカリの潜在形」といふことばで表現した。純粹の漢文訓読文には、まことにゴトカリの因子があつたわけである。

ゴトクナリ（ゴトクニアリ）形は、ゴトカリ（ゴトクアリ）形と、国文調および訓読調といふ位相のもとに對立してゐるのであつ

て、その点

あま雲たなびくまでおひのぼれるごとくに、この歌もかくのごとくなるべし

林にしげき木の葉の如くにおほかれど

事の心をえたらむ人は大空の月を見るがごとくにいにしへをあふぎて

の如き古今集の仮名序は、ゴトシの語尾が、終止形のシ以外、すべてゴトクニ（ゴトクナリ）系統であることに注意されなければならぬ。要するにゴトシの補助活用は漢文訓読ではゴトクアリ（ゴトカリ）のかり活用系である。換言すればゴトシは多分に形容詞的である。然し国文体ではゴトシはゴトクニアリ（ゴトクナリ）を以て補助活用とするから、ナリ活用であり、副詞乃至は形容動詞的である。

ゴトクナリがゴトシの補助活用として一般に認められてゐるのは、国文調として通用してゐるからであり、ゴトカリが認められてゐないのは、漢文訓読においてはその特性上ゴトクアリの形がそのままに原形を保ち、みだりにゴトカリの如き融合形を示さなかつた為であると思ふ。ゴトシといふ語の特殊性は以上の如く男子語脈あるいは漢文訓読体といふ位相の上から説明ができるが、同じ男子語脈にしても、純漢文訓読調に見られる形態と国文の上にそれが流用された形態とでは敘上の如き相違があつたことを知るのである。

註 1) 松尾拾治郎 国語法論攷 六二三頁

2) 所獲の功德も亦復是（の）如けむ（十ノ卅二）

若此 カクノコトケム（類聚名義抄僧上）

3) 吉沢義則 国語史概説 九三頁

### 三

ゴトシの本源の用法は副詞的であつたから、国文体におけるゴトクナリへの展開は、どちらかといへば正統であらう。一方ゴトシの形容詞的用法は、古形とはいへその点やや新しいものと思はれるから、漢文訓読における用法はむしろ新興のスタイルであるともいへる。それはともかく、具体的な特色としては漢文訓読体ではゴトキといふ連体形の用度が高く、国文体ではゴトクといふ連用相当形の頻用が目立つてくる。實際平安朝の草仮名文でゴトキといふ連体形の用例は少い。例へば、山田孝雄博士の平安朝文法史に引かれた粟麦豆ささげかくの如きさうやくのものあり。（宇都保 藤原の君）

は三春高基の言であるが、流布一本「かくのごとく」とあるから適当でないし、

さのごときひさうの事侍らむをばいかでか承らぬやうは侍はむとなむ申させ侍りつる。（源氏 浮舟）

は内舎人の薫大將への返事であつて、「荒々しくふつつかなるさまたる翁の声枯れさすがに氣色ある」者のことばとして特色を持たせたものであらう。

これに反してゴトキは訓読文に始終つきまといつて頻出し、例へば、やや古いが、金光明最勝王經古点では、

上の如キ事を以て（一ノ二）

人に象衆と馬象と事と兵との等キ衆なり（五ノ十）

那羅延のゴトキ自在あると（九ノ廿二）

の如く「如・等」字を訓む際にも、補読の場合にも、珍しくない。ただ、既に指摘されてゐるやうに、<sup>1)</sup> 一方では

満つ月の相光あるがゴトクアル陀羅尼無尽無限(四ノ六)

心虚空の如クある菩薩(一ノ二)

日光のゴトクある菩薩(一ノ二)

のやうにゴトクアル(形容詞的補助活用ゴトカリの潜在形)を以てする形が相当見られるから、ゴトキの連体機能はここでも既に絶対のものではなかったことがわかる。のみならず

亦水鏡の如キも分別有ること無ク(二ノ三)

能ク諸仏の不共の法の等キと及一切智智とを得ルなり(四ノ六)

正(し)ク曉し正(し)ク覺し能ク正(し)ク觀セルが如キアリ

(八ノ十九)

に至れば、ゴトキが体言相当として用ゐられた例と見られる。この様な形は

經(に)余時大衆中乃至亦得此法到於涅槃(と)いふが如きゾ

(法華玄贊三)

法藏の所弁の如きに至(り)ては(法華義疏序品初)

の如き、後の資料に至るに従つて多くなつてゐるが、それはあながち文体的特色とか、偶然とかいふべき理由でもなさうである。ゴトキの体言化即ち準体言としてのゴトキに指定の助動詞ナリの接続した形がゴトキナリであると考えすることは無理ではないと思ふ。しかもそれは多分に

如以无復煩惱故心得自在也(復・煩惱无(き)を以(て)の故に心に自在を得たりといふが如きなり(也)) (法華義疏序品初)

### 三一〇行

の如き「也」字に相應じて終止させる漢文体によつて助長された形態と考へたい。何故となれば、ゴトキナリのナリは終止形以外に活用しないのが建前であるからである。因みに「如、若、猶」等の字に應じて、「也・焉」等の助字で断止する文体は經書類には多い。

君子之過也如日月之食焉(論語 子張)

民之望之若大旱之望雨也(孟子 梁惠王)

夫兵猶火也(左伝 隱四)

兄弟之子猶子也(礼記 喪服)

子曰過猶不及也(論語 先進)

以上の如く、ゴトキナリは純漢文訓読の上に起つた形態であり、まづその前提条件としてゴトシを形容詞的に取扱つてゐることがいへなければならず、さらにその特色としてはこの種のナリは終止專用で、しかもそれなるがために、ニアリに分解された形を持たないといふことが指摘される。

これに対応する国文体のゴトクナリはゴトシの形容動詞的補助活用であるためゴトクニアリに分解出来、その活用は未然以下の六形を完備してゐるものである。漢文訓読体におけるこれに相当するものはゴトクアリで、いはゆるゴトカリの潜在形であつたことはもはや繰り返す必要はない。要するに程度の差こそあれ、国文調ではゴトクを、訓読調ではゴトキを準体言として想定することが可能であらう。

註 1) 春日政治 西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究 坤 二六頁

2) 中田博士訓読の大唐西域記長寛点には「何の故(に)……懼(る)ル所有ルが如キナル」といふ特例が見える。

#### 四

以上述べきたった結果によつて、今昔物語集におけるゴトシの用例を逐次検討して見たいと思ふが、許された紙面も尽きてきたから、ここではとりあへず終止用法として、ゴトシ、ゴトクナリ、ゴトキナリ、ゴトシナリの四形、特に後の三つについて考察するにどうめようと思ふ。但し、カクノゴトシ（如此・如是。如然もこれに準ずる。）については既にいはれてゐる通り、用法が異なる為にはばらく割愛したと思ふ。今昔におけるゴトシは卷二十のあたりを境にして急激に減少し、「様ナリ」と交替することが一般に指摘されてゐて、特に終止形「如シ」・「如クナリ」において著しいといはれる。

今昔においてゴトシの終止用法は左の四種の中「如シ」が最も多いことは論を俟たない。もつとも「ノ如シ」・「ガ如シ」と「用言連体形＋如シ」の三形があるが、趨勢はどの場合も大差ないから、いづれも一括して差支へないと思ふ。終止形の「如シ」は形態上、男子語脈の中での国文調あるいは、純漢文訓読調とかに区別すべきものではなく、広く両者に共通する形態として、無風地帯に属すると考へられるから、用例その他省略に従ふ。

ゴトクナリ（如ク也）は

栖力大王ノ宮ノ如ク也ト（二ノ廿四）以下

万ノコト皆此レカ如ク也（二十九ノ卅二）

に至るまで三十数例にのぼり、

彼ノ少録事カ勘（ヘ）タル如ク也（九ノ卅一）

の如き活用言連体形に直結の形も少数ながら混つてゐる。ゴトクナリのナリが活用することは既に述べられてゐる通りであるが、今昔では

老人ノ如クナラム輩（一ノ三、未然）仏事ヲ勤メケル事本ノ如ク也ケリ（三ノ四、連用）脛ハ針ノ如クニシテ（五ノ四、準連用）神ノ如クナル道也（六ノ二、連体）我ガ智恵ハ小キ箱ノ水ノ如クナレドモ（四ノ廿五、已然）

の如くである。国文調化した形であること勿論である。

ゴトキナリ（如キ也）は

実ニ此レ君ノ言ノ如キ也（三ノ卅五）以下

光ヲ放ツカ如キ也（十ノ七）等を経て

此レ生身ノ地藏ノ如キ也（十七ノ十六）

に至るまで十数例であり、特に卷十以前の天竺震旦部に集注的であることは周知の通りである。このナリ（也）は終止専用であることと相俟つて、「如キ也」が純漢文訓読調であることは容易にわかることである。つまり今昔においてもゴトクナリは国文調であり、ゴトキナリは訓読調なのである。然してゴトクナリの分布の広い点はやはり男子語脈における国文調化した訓読語が、今昔全体からは有勢であることを物語るものである。

ゴトシナリ（如シ也）は用例が少く、

人ヲ利益スル事仏ノ如シ也（四ノ四）人集ル事雲ノ如シ也（同上）

譬ヘバ外道ノ如シ也（四ノ九）国ヲ治ル事父ノ王ノ如シ也

（五ノ七）衆生ハ赤子ノ如シ也（六ノ十五）

等の数例に過ぎないが、これもゴトキナリと同様に天竺震旦部に限

つてあらはれ、終止専用である点からすれば、純漢文訓読調の形態であり、むしろゴトクナリの変形と見るべきであらう。一体「如・若・等・猶」等の字が助字「也」と対応する文体については上述したが、そのやうな字面を訓読において、ゴトシ（終止）として断止すれば、「ゴトシ「也」」に近い形態が生ずるはずであるから、ゴトキナリもゴトシナリも、漢文訓読の際、殆んど同じ字面において助成されたものと考へる。

万葉集にも、

時ならず過ぎにし子等が朝霧乃如也夕霧乃如也（二・二一七）  
あさぎりのこと ゆふぎりのこと

といふ用字法のあつたことが想起される。猶これに関して中田博士の訓読による法華義疏長保点には次の様な例が見られる。

如大道智勝仏十六王子説法花也（大道智勝仏の十六王子の法花を説きたまふト請ひたてまつるが如シ「也」）。（序品初 七四一行）  
故廻変食味也（故に食味を廻変するがゴトシ「也」）（序品末 三〇七行）

この他にも二三指摘することができ、前者は漢字についての訓読、後者は補読の例であつて、性格がやや異なるとはいへ、その間の事情をよく説明し得てゐるやうである。

ここに注意すべきは、今昔物語集が憑拠した典籍との関係であるが、これは必ずしも右の様な字面から割り出された結果ではない。例へば

釈迦ハ父ノ如シ我ハ母ノ如シ娑婆世界ノ衆生ハ赤子ノ如シ也（六ノ十五）

は「三宝感応要略録卷上悟真寺沙門釈惠鏡造釈迦彌陀像見浄土相感

応篇」にある、

釈迦如父我如母娑婆世界衆生如赤子。

に対応するが、「也」字はなく、

人ニ詔ヲ奉ルカコトシ（三ノ卅六）

如人奉詔也（法苑珠林卷六、六道篇鬼神神祇感應録）

では反対に「也」字が使はれてゐる。然しこれは、直接の現象として、たまたま今昔にそのやうな例がないからであつて、結局漢文における置き字・助字としての「也」がナリといふ訓を得て、国文体の中に侵入して来た結果であると見られ、ここにも和漢交流の面白い一面を窺取できさうである。

また「如ク也」・「如キ也」・「如シ也」の形態が

然レハ皆人風ニ靡ク草ノ如キ也（中略）震旦ノ方ハ常ノ山ノ如ク也。（中略）高ク直クシテ壁ヌルカ如シ。（十ノ一）

本国ニ還テ即位本ノ如ク也。太子亦本国ニ還テ国位ヲ委付シテ国

ヲ治ル事父ノ王ノ如シ也。（五ノ七）

の如く同一章（物語）の中に共存してゐることは編者がこの様な現象に無頓着であつたことを物語るやうである。然し天竺震旦部ではゴトクナリよりもゴトキナリ（ゴトシナリ）が優勢であつて、特に四、六、七巻にその傾向が著しいのは、十巻以前のこの部における文体的特色即ち漢文訓読の影響の強さを裏付けしてゐると考へる。

最後にゴトキが今昔では連体接続をしないのに「如キ也」の形態が存する点に関して私見を述べれば、ゴトキは連体接続の機能が衰弱して単に体言相当（準体言）として用ゐられる傾向が強くなつたのことは前述通りであるから、既に今昔ではその様な連体接続形が



一応消滅してゐて、すべて国文調のゴトクナルに変移してゐたと考へられる。従つてここにも和漢交流の微妙な動きが観取されるわけである。ゴトシはこの点では形容詞とは異なるけれども、「如キ也」は結果的にはなほ

不知シテ疑ヒ思ヒケルガ拙キ也トナム語リ伝ヘタルトヤ(十ノ八) 尼ニ令聞給ヒケルガ哀レニ悲ク貴キ也。(十二ノ十七) 止事无キ仏ノ跡形无クテ坐スルカ極メテ悲キ也(十二ノ廿四)

等、形容詞の連体形にナリ(也)の接続した形と異なるものではない。ただ形容詞の場合、終止形から「也」に続かないのは、ゴトシと違つて、活用語尾の機能が、それぞれの形において、旺盛であるからである。然らば、ゴトキとゴトクとはどの程度に体言化してゐたであらうか。対話文に

同シクハ形ノ如クノ学生ニ成給ナムヤ(十七、卅二)

と見えて、ゴトクが格助詞ノに接続してゐる形があるが、ゴトキノはない。従つて今昔ではゴトクの方が体言化が進んでゐたやうにも感ぜられる。然しこれはゴトキに代用されたゴトクナルの一変形と見られ、国文調のゴトクナリ系の用度の高かつた為であると考へれば、やはり漢文訓読調の国文調に変化した一現象と見なしうる。それはあなたがち漢文訓読調のゴトキの体言化が遅れてゐた証拠とはならないであらう。なほ、このことはカクノゴトシの場合と比較した上で、更に詳細に述べなければならぬが、今回はこれで一応擱筆する。

註 1) 堀田要治「如シ」と「様ナリ」とから見た今昔物語集の文章(国語

と国文学十八ノ十、一五八頁)

2) 同 一六六頁

3) 死シタル屍ノ如也(二ノ四) 物ヲ入タル力如也(二ノ二)等訓読不定の例は除外した。

後記 今昔物語集は丹鶴齋書本(国書刊行会)と新訂増補国史大系本による。

一九五九・一〇・一〇

九州大学文学部助教授